

栃教研連

# 会報

平成23年3月23日

栃木県教育研究所連絡協議会

事務局 〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1,070番地

電話 028-665-7204

FAX 028-665-7303

会報第40号

## 発行に寄せて

会長 瓦井 千尋  
(栃木県総合教育センター所長)

東北地方太平洋沖地震において被災された皆様に、心からお見舞いを申し上げます。一日も早く以前の生活に戻れますようお祈り申し上げます。

さて、栃木県教育研究所連絡協議会が主催団体の一つになっている栃木県教育研究発表大会は、今年、第11回を迎え、2日間の参加者は延べ1,100名になりました。今後とも、この大会が教育関係者にとって重要な情報発信の場であり意見交換の場であるよう、取り組みを更に強化していきたいと思えます。

ところで、平成23年4月1日から、小学校において新学習指導要領が全面実施となります。新指導要領に示された教育を確実に実施していくためにも、加盟各機関が研究成果を一層広く発信し、互いに情報の共有化を図り、研究成果を県内全体に敷衍させることが重要です。

そのために、本会報を役立てていただければ幸いです。

### 平成22年度栃木県教育研究所加盟機関連絡先等

栃木県総合教育センター	TEL 028-665-7204	<a href="http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/">http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/</a>
栃木県教育研究所	TEL 028-621-7216	<a href="http://www.t-rk.jp/trk/">http://www.t-rk.jp/trk/</a>
宇都宮市教育センター	TEL 028-639-4382	<a href="http://www.ueis.ed.jp">http://www.ueis.ed.jp</a>
上三川町教育研究所	TEL 0285-56-9155	<a href="http://www.kaminokawa-tcg.ed.jp/">http://www.kaminokawa-tcg.ed.jp/</a>
鹿沼市総合教育研究所	TEL 0289-63-2236	<a href="http://www.city.kanuma.tochigi.jp/kyouiku_a/kyouikukenkyuujo/index_kenkyuujo.htm">http://www.city.kanuma.tochigi.jp/kyouiku_a/kyouikukenkyuujo/index_kenkyuujo.htm</a>
下野市教育研究所	TEL 0285-52-1118	<a href="http://www.school.shimotsuke.ed.jp/">http://www.school.shimotsuke.ed.jp/</a>
小山市立教育研究所	TEL 0285-21-0200	<a href="http://www.oyama-tcg.ed.jp">http://www.oyama-tcg.ed.jp</a>
栃木市教育研究所	TEL 0282-21-2723	<a href="http://www.tcn.ed.jp/~gk01/Kenkyujo/Kenkyujo-top.htm">http://www.tcn.ed.jp/~gk01/Kenkyujo/Kenkyujo-top.htm</a>
矢板市教育研究所	TEL 0287-43-6217	<a href="http://www.city.yaita.tochigi.jp">http://www.city.yaita.tochigi.jp</a>
佐野市教育センター	TEL 0283-86-3499	<a href="http://www.city.sano.lg.jp/kyouiku/index.htm">http://www.city.sano.lg.jp/kyouiku/index.htm</a>
足利市立教育研究所	TEL 0284-43-1177	<a href="http://kyouiku.ashi-s.ed.jp">http://kyouiku.ashi-s.ed.jp</a>

# 教育研究所だより（事業概要）

## 栃木県総合教育センター

### 1 センター全体の事業

#### (1) センター開放事業「学びの杜の夏休み」

7月17日(土)に、子どもたちに豊かな体験(学習)活動を提供するとともにボランティア



団体等に活動の場を提供することを主な目的として、34の活動プログラムを実施した。1,600人余の参加者があり、好評を博した

#### (2) 栃木県教育研究発表大会

1月28日(金)・29日(土)の両日、栃木県総合教育センターを会場に第11回大会が行われた。延べ1,100人の教員や教育関係者らが参加し、盛会のうちに終了した。

### 2 各部の事業

#### (1) 生涯学習部

平成22年度は、研修では14講座を実施し、生涯学習推進指導者の養成、県市町関係職員の資質向上に努めた。また、公立図書館と学校の連携に関する調査研究を通しての提言、学習機会提供、学習相談・情報提供、市町・学校・団体等への支援を行った。特に、栃木県学習情報提供システム「とちぎレインボーネット」、栃木県生涯学習ボランティア活動支援情報システム「とちぎかがやきネット」により、学習相談・情報提供(家庭教育支援)やボランティア登録や受け入れ情報の充実に努めている。

平成23年度も、家庭と地域の教育力の向上といった今日的課題に対応した研修内容の充実、学習機会の提供、調査研究等を通して、生涯学習社会の形成に寄与していく。

#### (2) 研修部

平成22年度は、計画的かつ継続的な自主研修を奨励するため、「教職2～5年目研修」を開設した。(養護教諭は、平成23年度から実施)また、教科の希望研修を「専門性の充実」と「専門性の深化・発展」とに大別し、受講者のニーズに合わせて、専門研修2と土曜開放講座で開講した。さらに、教職5年目までの教員と本県の公立学校の教員を目指す学生等を対象に、「とちぎの教育未来塾」を土曜日の午前に21講座開設した。

平成23年度は、初任者研修等を見直すことで、初任者等の年度当初の負担を軽減し、児童生徒と向き合える時間を確保する。また、「校務処理システム研修」を開設し、高等学校における校務処理の効率化を目指す。さらに、平成24年度に向けて、管理職研修の日数や内容の一部を見直していく。

#### (3) 研究調査部

平成22年度は、とちぎの子どもの基礎・基本習得状況調査、各種教育統計調査などを実施し、結果を公表した。また、「規範意識調査」「組織力の向上を図る現職教育の充実」「学ぶ意欲の向上」、「校務LANの活用」、「教科指導の充実」に関する参考資料を作成し、配布した。これらの成果物は総合教育センターのホームページより閲覧やダウンロードが可能であり、授業に役立つ実践資料を掲載した「教材研究のひろば」と共に活用してほしい。

平成23年度も、学力向上や今日的課題への対応に関する事業等を実施する予定である。

#### (4) 教育相談部

平成22年度は、教育相談研修及び特別支援教育研修で19講座を実施した。調査研究では、特別支援学校の生活単元学習に関する研究成果を小冊子にまとめ配布した。また、学級・ホームルーム担任のための教育相談第18集では、自殺予防教育について啓発を行った。

平成23年度は、校内支援体制研修など新規研修の実施する。調査研究では、特別支援学校及び中学校特別支援学級の課題に対応した研究を実施し、指導資料を作成する。教育相談事業では、来所相談のほかに、各学校等が実施する研修会及び事例研究会に指導主事を派遣し、児童生徒の学校生活を支援する。

#### (5) 幼児教育部(幼児教育センター)

平成22年度は、幼・保・小連携の推進のため、県内2市で連携推進充実事業を実施したり、保育・教育の質の向上のため、地区別合同研修、幼・保・小教職員相互職場体験研修などを実施したりした。また、幼稚園・保育所等が家庭教育を支援できるよう、幼稚園・保育所等パワーアップセミナーを実施した。さらに、幼児教育情報誌「おうち」やリーフレット「家庭教育のすすめ」の発行を通じて情報を提供したり、保育・教育アドバイザーを幼稚園・保育所・市町教委に派遣したりした。

平成23年度も、今日的な課題に対応した研修等を含め、23事業を実施する予定である。

# 栃木県連合教育会

当会の研究部及び教育相談部では、調査研究、教育相談とカウンセラー養成研修、研究紀要発刊等を中心にした事業を実施している。

＜平成22年度＞

## 1 調査研究事業

### (1) 社会科研究部会

テーマ「子どもと教師が変わる授業研究」のもと小学校4年「益子焼きの発展に尽くした人々」、中学校3年「これからの茂木町」の授業実践等により、研究紀要にまとめる。

### (2) 言語力育成研究部会

テーマ「言語力育成のためのカリキュラム・デザインに関する理論的・実践的研究」のもと、幼・小・中・高での教育実践を通して、2年間の研究成果を研究紀要にまとめる。

### (3) 国際教育研究部会

テーマ「歴史的建造物・文化遺産・伝説等について理解を深め、英訳し、教材化する」のもと、県内の項目一覧表と教材例を小学校・中学校・高等学校のモデル教材案を作成。次年度研究活動へのベースを築いた。研究紀要は、次年度末にまとめる。

### (4) 特別支援教育研究部会

テーマ「子どものニーズに合った学校づくり～障がい理解と交流及び共同学習」のもと、交流及び共同学習に関するQ&A形式による原稿（案）を作成した。研究紀要は、次年度にまとめる。

## 2 教育相談部の教育相談・研修講座事業

平成22年4月～12月までの面接相談受理件数は182件で高校生・成人等が多く、内容は不登校関係が多い。事例研究を通して対応、また研修講座と母親のためのカウンセリング教室を開催した。

## 3 実践研究奨励援助事業

実践研究の応募数は4点。最優秀1点、優秀2点、佳作1点で、教育振興の集いで表彰

## 4 栃木県特別支援教育研究大会

平成22年8月23日、栃木県教育会館の大ホールで開催し参加者は約300名。午前の部の発表は特別支援学校・小学校の発表で教員の専門性を高める上で有効だった。午後

の部の講演は、難病多発性硬化症で明日が来るか分からない中、車イスランナーとして、北京パラリンピックで金メダル2個をとった感動的な内容であった。

＜平成23年度＞

## 1 調査研究事業

### (1) 言語力育成研究部会

テーマ：「言語力育成のためのカリキュラム・デザインに関する理論的・実践的研究」

成果：研究成果を纏め、配布する。

### (2) 国際教育研究部会

テーマ：「歴史的建造物・文化遺産・伝説等について理解を深め、英訳（要約）し、教材化する。」

成果：研究紀要にまとめる、配布する。

### (3) 特別支援教育研究部会

テーマ：「子どものニーズに合った学校づくり」

成果：研究紀要に纏め、配布する。

## 2 教育相談部の教育相談事業

### (1) 面接相談（月曜日～土曜日）

### (2) 事例研究（週1回）

### (3) 母親のためのカウンセリング教室

## 3 教育相談部の教育相談研修講座

### (1) 個人面接の技法

### (2) 発達障がいセミナー

### (3) 不登校セミナー

## 4 実践研究奨励事業

会員の研究意欲を喚起し、研究活動を活発にするために、会員の実践研究に対して援助する。そのため、研究を募集し優秀なものに対して研究奨励金を与え、新しい時代を拓く教育的・文化的活動を推進する。

## 5 栃木県特別支援教育研究大会

### (1) 期日：平成23年8月10日（水）

### (2) 会場：栃木県教育会館 大ホール

### (3) 日程：

13：00 開会

13：30 研究発表

① 県立特別支援学校

② 小・中学校

14：30 講演会

16：00 閉会

# 宇都宮市教育センター

## 1 相談事業

- (1) 教育相談事業
  - ① 来所相談、訪問相談
  - ② 臨床心理士による相談
  - ③ 医師（精神科医・小児科医）による相談
  - ④ 就学指導委員会の開催
- (2) 適応支援事業
  - ① とらいあんぐる、つげの木教室  
不登校児童生徒の学校復帰に向けた小集団活動を中心とした支援
  - ② まちかどの学校  
不登校児童生徒の心の安定と社会的自立に向けた個別活動を中心とした支援
  - ③ かすたネット  
発達障がい等のある小学生の社会的スキルの定着に向けた小集団での学習
- (3) 学校生活支援事業
  - ① 全25中学校と、小学校へ6名のスクールカウンセラー（SC）の派遣  
専門的な見立てに基づく教員へのコンサルテーション等
  - ② メンタルサポーターの全中学校への派遣  
生徒の気軽な話し相手、相談相手等
  - ③ かがやきルーム指導員の配置（63名）  
学習や生活に課題を有する児童への個別や小集団指導の実施等
  - ④ 要配慮学級対応指導助手や、認定就学対応指導助手の配置（34名）
  - ⑤ 生活補助員や特別支援教育支援員、要配慮学級緊急対応職員の配置（34名）
  - ⑥ 専門家チームによる巡回相談の実施  
医師・臨床心理士・特別支援学校・小中学校教員・センター職員等による、継続的な巡回相談
- (4) 児童・生徒の実態調査
  - ① 不登校に係る実態
  - ② 「Q-U」（小3～中3全学級対象）  
（小5、中2は年2回実施）

## 2 研修事業

平成22年度は、本市の学校教育の現状と課題を踏まえつつ研修及び各種連絡会の内容を

を精査し、集約・統合の方向で検討を行い、53講座を実施

## 3 情報教育事業

- (1) 情報活用推進事業
  - ① 情報教育の推進
  - ② ICT活用による授業力向上
  - ③ 情報モラル教育の充実
  - ④ WEBカリキュラムセンター
  - ⑤ 地域素材のデジタル教材化
  - ⑥ 学校ホームページ公開・支援
- (2) システム管理運用事業
  - ① 教育センターネットワークシステム運用管理
  - ② 教育センターサーバ運用管理
  - ③ 教育情報システム運用管理
  - ④ 情報セキュリティ対策
  - ⑤ 教員用パソコン導入更新

## 4 調査研究事業

- (1) 今日的な教育課題に関する調査研究
  - ① 「外国人児童生徒教育拠点校日本語教室における指導及び教室運営に関する調査研究」
  - ② 「宇都宮版準備運動・補強運動作成に関わる調査研究」
- (2) 校内研修サポート事業  
授業を開き合うことを通して、同僚性の構築・学校力の向上を目指す校内研修に、大学教員を年間4回程度派遣  
※平成22年度は小学校5校で実施

## 5 その他

- (1) 教育センター公開講座  
市民への啓発を視野に入れたテーマで年1回土曜日に実施
- (2) 各種資料の発行  
「センターだより」をはじめ、特別支援教育・不登校・研修・情報教育に関する啓発資料を発行。センターホームページからダウンロードが可能

# 上三川町教育研究所

## 平成22年度の事業

### 1 研修事業

#### (1) 一般研修

##### ○教育講演会

本町出身の坂本保富信州大学教授による講演「教えることは学ぶこと」を実施

#### (2) 専門研修(主なもの)

- ①人権教育研修
- ②学校図書館研修
- ③情報教育研修
- ④養護教諭研修

13の専門分野ごとに29講座実施

#### (3) 希望研修

- ①小高連携理科実技研修
- ②特別支援教育研修

小高連携理科研修は、上三川高校の先生方を講師に、小学校の学習教材を発展させる内容についての実技講習を実施した。また、特別支援教育研修では、主として非常勤職員を対象に、特別支援教室の授業参観や配慮を要する児童生徒についての指導の在り方についてカウンセラー等から意見を伺うとともに、意見交換を行う3つの講座を実施した。

その他、児童虐待に係る問題について、中央児童相談所等から講師を招き、5講座を実施した。

### 2 調査研究事業(主なもの)

- (1)教育目標等管理研修
- (2)学習指導法実践研修
- (3)教育条件整備検討委員会

上三川町立小中学校の教育条件の整備について次の3点の調査・検討をした。

- ①小中の連携及び一貫教育の在り方
- ②2学期制の実施と今後の在り方
- ③校務に係る事務のスリム化

検討結果として報告書を作成した。

### 3 相談事業

(1)教育相談員(3名)による面接相談の実施

#### (2)町カウンセラーの町内小学校配置

平成22年度から、県カウンセラーの配置されていない小学校に町カウンセラーを配置し、巡回相談等の充実を図った。

#### (3)適応指導教室「オアシス」の運営

### 4 資料作成・発行

#### (1)児童生徒の基本的な生活習慣形成のためのパンフレット

町内児童生徒の過去3年間の実態調査をもとに問題点を洗い出し、今後、全小中学校、家庭及び地域が連携を図りながら重点的に取り組む内容についてのパンフレットを作成し、全家庭及び公共施設等に配布した。



#### (2)人権教育実践集録第29号

#### (3)教育研究所研究集録第29号

## 平成23年度の事業

今後の新学習指導要領全面実施にあたり、児童生徒の「確かな学力」を一層充実させるため、また、教師と子どもが向き合う時間の確保に向け、研修の回数や内容、また研修そのものについて精選を図る。

今後、魅力ある学校づくりに向けた教職員の意欲と資質の向上を目指し、新たに、ミドルリーダー教員の育成や、小中間の教員連携・交流の推進に力を入れた研修を実施する。

# 鹿沼市総合教育研究所

## 平成 22 年度の事業

### 1 調査研究事業

- (1) 子ども総合サポートセンター事業
- (2) 「心を育てる学校教育」推進事業
- (3) 「鹿沼教育ビジョン」策定事業
- (4) 学校教育計画への支援事業
- (5) 平和に関する教育推進事業
- (6) すべての子どもに目が行き届く幼保小中連携の充実事業
- (7) いじめ問題対策事業
- (8) ふるさとを愛する心を育てる地域教材の作成
- (9) 学力調査（C R T 学力調査）
- (10) 人権教育の推進
- (11) 情報教育の推進
- (12) 外国語活動の推進

### 2 教育相談事業

- (1) 教育相談室による教育相談事業
  - ① 来所、訪問、電話による相談
  - ② 児童生徒、保護者、教員を対象とした相談
  - ③ 就学相談、不登校・いじめ等の教育相談、子どもの発達に関する相談 など
- (2) 適応指導教室「ニューホープ」「アミニティホーム」による教育相談事業
  - ① 学習活動、創作活動、勤労奉仕活動
  - ② 学校との連携による「チャレンジ登校」
  - ③ 宿泊活動
  - ④ スポーツ活動
  - ⑤ 学生による活動支援（8月、2月）
- (3) 不登校対策ネットワーク事業
  - ① 学校相談担当教育相談専門員の配置
  - ② 不登校生徒の早期発見・早期対応
  - ③ 教育相談室や適応指導教室との連携

### 3 教育関係職員の研修事業

- (1) 特別支援教育研修
  - ・外部講師による講話演習「通常学級における特別支援教育のあり方」

- (2) 児童・生徒指導担当者研修会
  - ・児童・生徒指導推進のあり方についての研修及び情報交換
- (3) 不登校対策ネットワーク研修会
  - ・不登校児童生徒の事例研究とコンサルテーション
- (4) 学級経営研修会

- ・外部講師による2日間の講話演習「Q-Uと学級集団づくりについて」



- (5) 人権教育研修会
  - ・直接指導の在り方についての研修
- (6) 子どものためのサポートボランティア養成講座
  - ・適応指導教室市民ボランティアの育成
  - ・特別支援学級市民ボランティアの育成
- (7) 普通救命講習会
  - ・AEDの扱い方を含めた、応急手当に必要な知識と技能についての研修
- (8) 小学校英語活動研修会
  - ・担任とALTによるT・Tの外国語活動の研究授業の実施 など

### 4 教育に関する資料等の作成・収集

- ・人権教育副読本「なかま」の作成、地域学習教材の作成、研究学校紀要等情報収集

## 平成 23 年度の事業

### 1 調査研究事業

- ・継続、新規の研究事業を実施していく予定

### 2 教育相談事業

- (1) 教育相談室による教育相談事業
- (2) 適応指導教室「ニューホープ」「アミニティホーム」による教育相談事業
- (3) 不登校対策ネットワーク事業 など

### 3 教育関係職員の研修事業

- (1) 新規採用教職員研修会
- (2) 学級経営研修会
- (3) 市非常勤講師研修会 など

# 下野市教育研究所

## 平成22年度事業の概要

### 1 調査研究事業

- (1) 学力向上調査研究
- (2) 教科研究
- (3) 情報教育研究
- (4) 小学校社会科副読本の活用研究
- (5) 小中学校英語の連携
- (6) 小中一貫教育研究
- (7) 長期欠席児童・生徒調査

### 2 研修事業

- (1) 一般研修(教職員全体研修会)
    - ①市教育行政説明会(4月7日)
    - ②合同全体研修会(8月9日)
      - ・講演会「地雷除去に挑む  
～豊かで平和な大地への復興～」  
講師：山梨日立建機株式会社  
代表取締役社長 雨宮 清 氏
      - ・学校支援ボランティア見本市(メッセ)
- ※市教育会と共催で、初の実施



- ③教育研究発表会(1月19日)
  - ・言語活動に関する研究報告
  - ・eラーニング研究報告
  - ・小中一貫教育に関する研究報告
  - ・内地留学報告(紙上発表)

#### (2) 専門研修

- ①児童・生徒指導研修
- ②人権教育研修
- ③道徳教育研修
- ④通級指導教室担当者研修
- ⑤学習指導主任等研修
- ⑥小中学校英語研修

- ⑦ALT活用事業研修
  - ⑧理科教育研修
  - ⑨新規採用教職員研修
  - ⑩教職2・3年目研修
  - ⑪幼保小連携研修
  - ⑫特別支援コーディネーター研修
  - ⑬食育担当者研修
  - ⑭支援員(生活・図書)研修
- (3) 希望研修(※新規研修)
    - ①道徳教育実践研修
    - ②特別支援教育研修
    - ③ふるさと学習現地研修

### 3 相談事業

- (1)教育相談
  - ①学校への各種相談員の配置
  - ②適応指導教室「スマイル教室」の運営
  - ③教育相談窓口の開設
- (2)就学相談
  - ①就学相談員の配置
  - ②就学相談窓口の開設
- (3)特別支援教育相談
  - ①特別支援教育相談員の配置
  - ②特別支援教育相談窓口の開設

### 4 資料収集・広報

- (1)研究所研究集録の発行
- (2)研究所情報発信誌「KEYAKI」の発行
- (3)適応指導教室要覧、パンフレット作成
- (4)特別支援教育パンフレット作成・配付
- (5)各種資料の収集・保管、貸出
- (6)けやきネットを活用した広報活動の充実
  - ・研究所HPの内容更新
  - ・グループウェア「WinBird」の効果的活用

## 平成23年度事業の方針

下野市では平成23年度を、学習指導要領の全面実施(小学校)及び全面実施に向けた準備期間(中学校)として捉え、「学ぶ力を育成する授業づくり」を最重点項目として、「言語活動の充実」等の各種研究・研修を実施する。

また、「選択と集中」の視点から、「小中連携教育研究」と「特別支援教育」をより充実させ、全中学校区での研修や交流、夏期休業中の「希望研修」を拡充していく予定である。

# 小山市立教育研究所

本年度の主な事業の実施状況は、次のとおりである。

## 1 調査研究部

### (1) 学習診断検査の実施

市内小学4・5年生、中学2年生全員を対象に知能・学力・学習適応性検査を実施した。結果を分析・考察して報告書を作り、市内小中学校全教員に配布し、指導法の工夫・改善に役立てた。

### (2) 今日の教育課題に関する調査研究

学習診断検査から見えてきた課題を解決するための調査研究を行った。

学力については問題例を示し、学習適応性では過去との比較をしながら「所員研究集録」にまとめ、市内小中学校全教員に配布した。

## 2 教育相談部

不登校や問題行動等の未然防止に向けた学級集団づくりに教育相談の視点を当て、「学級経営に活かす『育てるカウンセリング』構築に向けた構成的グループエンカウンターの実践」を通して、子どもたちにとって「互いのよさを認め合い、居心地のよい学級集団」の育成に関して研究し、具体的な成果や課題を「所員研究集録」にまとめ、市内小中学校全教員に配布した。

## 3 研修部

### (1) 指定研修（主なもの）

- ア 人権教育主任研修
- イ 教育課題研修（学習指導）
- ウ 英語指導者研修
- エ 新規採用教職員研修
- オ 情報教育担当者研修
- カ 特別支援教育研修

### (2) 希望研修（主なもの）

- ア 授業力アップ研修①～④
- イ コンピュータ実技研修

校内研修の活性化を図るために、上記の研修を実施し、「学習指導」「心の教育」「情報

教育」に関する指導技術の向上に資する内容となっている。また、各校から代表が参加する指定研修と希望者参加の希望研修があり、教育の不易と流行の配分を考慮した研修とし、参加者は各校で伝達研修を行っている。

### (3) 教育用 I C T 機器導入校活用支援研修

整備初期におけるコンピュータの操作研修を実施することにより、当該校の情報教育の推進及び円滑なシステムの運営を図ることを目的とし、パソコン室の PC 入れ替えに伴う小学校5校及び中学校7校で実施。各学校を会場とし、担当指導主事及び導入業者インストラクターが実技研修会を行った。

## 研修会の様子



### 授業力アップ研修①

（国語・算数）

7 / 23

参加者 20名

## 4 資料部

- (1) 「思川桜」「教育研修シリーズ」「学校課題研究集録」「所員研究集録」「学習診断の報告」等の発行
- (2) 社会科副読本の編集と web ページ化
- (3) web ページ「小山こどもの森」での教育情報の提供とデータベース化
- (4) 教育関係図書や教育機器の整備と貸し出し

## 5 平成23年度の事業

各部の事業内容は、大きく変わることはないが、研修内容の見直しを進め、授業力向上を主眼とした研修の充実を図るとともに、総合教育センター主催の基本研修との関連付けを図っていく。



# 栃木市教育研究所

## 1 目指す方向性

本研究所では、「同僚性の向上」を掲げ、以下の3つの機能の充実を目指して学校を元気にするための活動を行っている。

- ・複雑化し深刻化している教育問題を深く「考える」機能
- ・様々な教育問題に全力で立ち向かっている先生方を「助ける」機能
- ・先生方や保護者、その他の専門家が「学びあえる」場を提供する機能

## 2 平成22年度の主な事業

本研究所は、市町合併に伴い部会の構成を見直し、新たな活動をスタートした。部会ごとに事業方針や内容を検討して、研究員である先生方の自主性を尊重した活動を展開している。主な活動状況は、次のとおりである。

(1) 直面する教育課題を「考える、提案する」取組

### ①国際教育部会

- ・外国語活動の授業のポイントやアイデアなど実践例の研究
- ・ビデオリフレクションにより外国語活動の進め方や担任の役割、評価の仕方などを研修

### ②人権教育部会

- ・児童虐待の現状と学校としての対応に関する各種資料を収集し現場の先生方に情報を提供

### ③理数教育部会

- ・地域を流れる川の教材化
- ・理数教育に関する児童生徒の実態を把握するための意識調査について内容等を検討



### ④情報教育部会

- ・市の情報モラル教育の進め方を検討し、情報モラル指導モデルカリキュラムの作成
- ・情報教育担当者研修会において電子黒板活用法の研修を実施

### ⑤指導力向上部会

- ・学習指導主任研修会において、各校の校内研修や授業力向上に向けた取組について情報交換し、成果と課題を整理

### ⑥特別支援教育部会

- ・支援の必要な児童生徒についての情報収集の方法や校内研修の進め方、保護者啓発のための資料の活用について検討

### ⑦教育相談部会

- ・臨床心理士による学校訪問や電話相談を実施

(2) 教職員の自主的な研修を「助け、学びあう」取組

### ①土曜日や平日の勤務時間外に行う希望研修

- ・授業力の向上と同僚性の構築を目指し、「ビデオを使った授業リフレクションによる教師力向上セミナー」と「いきいき校内プロジェクト」を実施



- ・特別な教育的支援を必要とする児童生徒について理解を深め、よりよい支援の在り方を考える「ゆっくり学習会」を実施

- ・適応教室が中心になって不登校児童生徒の支援に対する具体的かつ適切な指導、支援を進められるように「教育相談実践研修会」を実施

### ②市教育研究発表会

- ・「学校で実際に使える研究成果」を目指して、各部会ごとの活動をまとめた教育研究所シリーズを作成し、口頭発表、紙上発表にて市内教職員を対象に発表(平成23年1月25日(火))

## 3 平成23年度の事業方針

部会の自主性を尊重し、現在学校が抱えている教育課題への対応や本市の特色ある教育の在り方について各部会で活動内容を検討しながら研究を進める。特に新市として先生方が自主的に「学びあえる」場を積極的に提供していきたい。

# 矢板市教育研究所

## 平成22年度の事業

### 1 調査研究事業

- (1) 基礎学力向上委員会  
国語、算数・数学、英語において、小中9年間の系統性と連続性のある基礎的基本的な学習の定着度を図るとともに授業のあり方を独自のテスト「トライヤル」をもとに調査研究した。
- (2) 第20回矢板市子ども環境会議  
各小中学校代表の児童生徒と地域住民、企業による「エコ活動 実践しよう家庭地域で！」をテーマに「矢板市温暖化防止5か条」に基づいて自分たちが地域とともに実践できることを提案し、市民へ呼びかけた。

### 2 研修事業

- (1) 理科実験講座  
模擬授業による理科実験講座を実施し、実験のポイントと魅力ある授業づくりについて研修した。
- (2) 小中一連携教育研修  
宇都宮大学教授 松本 敏 先生を講師に招き、小中一貫教育、連携のあり方について授業づくりを中心に研修会を行った。
- (3) Q-Uテスト活用研修  
市内全小中学校(小3～中3)で実施したQ-Uテストの結果をもとに、学級経営への生かし方について演習を行った。
- (4) 電子黒板活用研修  
学習への効果的な電子黒板の活用について授業実践による研修会を行った。
- (5) 特別支援教育研修会  
通級指導教室に通う保護者と教員を対象に臨床心理士 秋場美智子 先生を講師に子どもへのかかわり方、声のかけ方などペアレントトレーニングを行った。
- (6) 市非常勤教育職員・学校講師研修  
市が採用した非常勤教職員及び学校講師の資質の向上を目指し、学習指導の在り方、配慮を要する児童生徒への指導の在り方に

ついでに研修を行った。

- (8) 小学校外国語活動研修会  
情報交換や模擬授業を行い、小学校での外国語指導助手との授業のあり方についての研修会を実施した。
- (9) 漢検・数検講座  
小学校3年生以上の希望者に月2回宇都宮大学教育学部学生と市内中学生、教員OBがボランティア講師となり学力向上のための学習支援を行った。

## 平成23年度の事業

### 1 調査研究事業

- (1) 基礎学力向上に関する調査研究  
国語、算数・数学、英語の授業における習得と活用についての調査研究
- (2) 家庭学習等に関する調査研究
- (3) 矢板市子ども環境会議
- (4) 社会科副読本編集委員会
- (5) 矢板市教育研究所だよりの発行

### 2 研修事業

- (1) ふるさと学習体験活動研修会  
小中の連続性を考慮した郷土への愛着を育む体験活動の在り方について
- (2) 小学校外国語活動研修  
ALTとの授業の在り方について小学校教員と中学校英語担当による授業研修
- (3) 学級経営研修  
学級担任が行う特別支援教育について
- (4) 社会教育主事有資格者等研修会  
学校支援ボランティアの活用に関する研修
- (5) 情報機器活用研修  
情報機器の効果的な活用についての研修
- (6) 市非常勤教育職員・学校講師研修  
講話と演習による研修
- (7) 漢検・数検講座、子ども英会話講座(小学生) 英語講座(中高生)

### 3 教育相談事業

保護者や教職員がかかえる児童生徒等の諸問題に対し、電話や来所による援助や支援を行う。

# 佐野市教育センター

## 平成 22 年度の事業

### 1 調査研究に関すること

#### (1) 教育の諸問題についての調査研究

下記のテーマで調査研究に取り組み、研究内容を紀要として CD-R 及び冊子にまとめ、市内全教員や関係諸機関等に配布

- ①小中一貫教育調査研究委員会  
「小中一貫教育の展望と課題」
- ②小学校学習指導調査研究委員会  
中学校学習指導調査研究委員会  
「算数・数学における基礎・基本の確実な定着を図る学習指導について」
- ③情報教育調査研究委員会  
「市内小中学校における教育の情報化の推進」
- ④特別支援教育調査研究委員会  
「小中の連携を図った特別支援教育の推進」

#### (2) 諸検査の実施

知能検査、総合学力調査の実施

#### (3) ICT活用研究推進校指定

佐野市立界小学校に調査研究を委嘱

### 2 教育相談に関すること

当教育センター所員による来所及び電話での随時相談と、専門の教育相談員(医師 2 名、幼稚園園長 1 名、小学校教員 4 名、中学校教員 1 名)による教育相談を実施

臨床心理士による学校への巡回相談、カウンセリングを実施

### 3 教育振興に関すること

#### (1) 教育講演会

「学力・体力・気力の向上は生活習慣の立て直しから ～データで検証する「早寝・早起き・朝ごはん」～」

東海大学体育学部教授

小澤 治夫 先生

#### (2) ICT活用学習指導研修会 (3 回)

- ①PC 教室等教育用 PC 活用研修 (1 回)

対象：情報教育担当教員

コンピュータ室のシステムやソフトウェアの特徴について学び、適切な管理ができる教員の育成を目指した。

#### ②教育用ソフトウェア等活用研修 (2 回)

対象：学習指導主任等

マルチメディア教材の作成や電子黒板の活用法を学び、学習指導に積極的に ICT を活用しようとする教員の育成を目指した。

#### (3) 学校教育相談基礎研修会 (4 日間)

対象：未受講の教員対象

学校教育相談活動に意欲的に取り組む教員の育成を図った。

#### (4) パワーアップ研修講座 (6 回)

希望者を募り、平日(夜間)に「情報モラル」、「情報セキュリティ」、「電子黒板の活用」、「プレゼンテーションソフトの活用」についての研修を行った。

#### (5) 特別支援教育研修会 (1 日間)

対象：幼保・小、中、高教職員等

臨床心理士を招聘し、発達障害のある子どもへの支援についての講話を行った。

#### (6) さわやか指導員の配置

- ①さわやか教育指導員 6 2 名配置

- ②さわやか健康指導員 8 名配置

#### (7) 心の教室相談員の活用

スクールカウンセラー未配置中学校等 4 校に配置

#### (8) 子どもと親の相談員の配置

小学校 2 校に配置

#### (9) 情報教育アドバイザーの活用

教育センターに 1 名配置

#### (10) スクール・サポート・ネットワーク (SSN) 事業

教育センターに不登校児童生徒及び特別な教育的支援を必要とする児童生徒対応指導員を各 1 名配置

#### (11) 特別支援学級支援員の配置

新設の特別支援学級等に支援員 1 2 名を配置

#### (12) ICT支援員の配置

支援員 1 名が 2 校を担当、1 9 名を配置

## 平成 23 年度の事業

平成 23 年度においても、基本的には同様の事業を実施していく予定である。

# 足利市立教育研究所

## 【平成22年度の主な事業報告】

### 1 研究員委嘱による調査・研究

「平成22年度版『学習指導ハンドブック』の作成研究」「『のびゆく足利』改訂研究」「基礎・基本の確実な定着を図るための学習指導改善研究（算数）」「事務処理の効率化を目指す学校事務の共同実施研究」について成果をまとめ研究集録等に掲載した。

### 2 教職員研修

本市では、教職員に対する研修を夏休みを中心に開催している。

教職員としての豊かな人間性を磨くための専門研修では、足利市みどり文化・スポーツ財団理事長の吉田哲也先生に教師論・教育論を、足利工業大学長の牛山泉先生にリーダー論を、栃木県教育研究所教育相談部長の丸山隆先生に児童生徒理解を、そして、永沢総合法律事務所代表弁護士の永沢徹先生に教職員のためのリーガルマインドをテーマに講話をお願いした。

その他、学習指導総論では、千葉大学教育学部教授の天笠茂先生、理数教育では、東京大学大学院教育学研究科教授の市川伸一先生、全国珠算教育連盟本部主任研究員の谷賢治先生、特別支援教育では、植草学園短期大学福祉学科教授の漆澤恭子先生、宇都宮大学教育学部教授の池本喜代正先生、NPO 法人えじそんくらぶ代表の高山恵子先生、児童生徒指導では、宇都宮大学教育学部准教授の川島芳昭先生、論語研修会では、足利学校論語素読講師の須永美知夫先生を講師にお迎えし、延べ1千2百名を超える教職員が各研修会に熱心に取り組んでいた。

### 3 教育相談

いじめや不登校などに悩む児童生徒に対応し、学校生活への不適応を解消するために、学校教育相談室を運営し、教育相談及び適応指導を実施している。

また、栃木県教育研究所教育相談部長の丸山隆先生と栃木県カウンセリングセンター臨床心理士・学校心理士の江口悠先生をスーパーバイザーに招き、小中学校へ訪問し、教職

員等へのアドバイスを行うとともに、現職教育を通して教職員の資質向上を図っている。

## 【平成23年度の主要事業紹介】

### 1 調査・研究

- (1) 「足利市の教育目標」具現に関する調査
  - ① 第6次具現状況評価報告書の活用
  - ② 児童生徒の学習・生活の実態の把握
- (2) 学習指導改善の研究学校の支援
- (3) 研究員委嘱による調査研究
  - ① 環境教育の充実のための研究
  - ② キャリア教育の充実のための研究
  - ③ 学校事務の共同実施研究
  - ④ わかる授業のためのICT活用研究<観>
  - ⑤ 教育相談ハンドブックの改訂研究<観>
- (3) テストバッテリーや学力調査等の実施

### 2 学習指導教材センター

- (1) 教材研究・教材開発の場と素材の提供
  - ① 各教科の指導案や指導資料の収集
  - ② 指導案や指導計画づくりの支援
- (2) 専門部活動

小中学校の教員を専門部員に委嘱し、学習指導改善に役立つ教材・教具を開発・作成。国語科、算数・数学科、社会科、英語科の各教材作成専門部の活動など。

### 3 教職員研修

今日的教育課題と教職員ニーズに応じた研修を開催する。(大学等との連携)

- (1) 新任者研修  
新任校長実務研修会 新任教頭実務研修会  
新規採用教職員研修会
- (2) 教職員専門研修  
教師論・教育論 学校教育総論児童生徒理解
- (3) 教職員基本研修  
情報モラル研修会 メンタルヘルス研修会
- (4) 教職員実践研修Ⅰ  
学校事務職員研修会 英語教育研修会  
道徳教育研修会 特別支援教育研修会  
学習指導改善研修会 人権教育研修会
- (5) 教職員実践研修Ⅱ  
そろばん研修会 論語研修会

### 4 教育相談(教育相談活動・スーパーバイザー・適応指導)

### 5 子ども学習講座

- ・小学生5.6年生を対象に科学講座を開設

### 6 情報教育サポーター配置事業

# 栃木県教育研究発表大会が開催される

学校教育と生涯学習に関する研究成果を発表する平成22年度栃木県教育研究発表大会が、平成23年1月28日(金)・29日(土)の両日、栃木県総合教育センターを会場に実施された。2日間で延べ約1,083人の参加をいただき、盛会のうちに終了した。

「伸ばそう 栃木の教育力 ーすべては明日を担うとちぎの子どもたちのためにー」というスローガンの下、今年度は20の部会で53の発表が行われた。

部会に先立ち行われた開会式では、県教育委員会 岡田豊子委員長の挨拶、栃木県中学校長会 小林 修一副会長の挨拶をいただいた。



挨拶をする県教育委員会 岡田豊子 委員長

28日には、キャリア教育部会、児童・生徒指導部会、校内研修部会、学力向上部会、生涯学習部会、小学校学習指導部会、国語部会(小・中)、社会、地歴・公民部会(中・高)、数学部会(中・高)、理科部会(中・高)、英語部会(中・高)が行われた。

特に、生涯学習部会では、「図書館と学校の効果的な連携の在り方」をテーマとし、調査研究としては、県内図書館へのアンケートに基づく現状や課題の報告と、それに基づく効果的な連携の在り方や連携充実のための方策についての提案がなされた。また実践事例としては、学校と図書館の間で構築したシステムにより成功した県内の事例と、市図書館が学校図書館を所管し「読書のまち」づくりを目指す北海道の事例が紹介された。

29日には、幼・保・小連携部会、小学校外国語活動部会、学校経営部会、心の教育部会、健康教育部会、人権教育部会、言語力育成部会、教育の情報化部会、特別支援教育部会が行われた。

特に、幼・保・小連携部会では、「幼児期から

児童期への教育」をテーマとして、幼稚園からは、子どもが自ら体と心を動かして精一杯遊ぶことの重要性や必然性、保育園からは、子どもの「食を営む力」の基礎を培うための豊かな食体験の実践、小学校からは、子ども、保護者、幼・保・小教職員へのアンケートをもとにした小1プロブレム解消のための方策、がそれぞれ発表された。

今年度も宇都宮大学から8人の先生方に10部会で指導・助言者として参加いただき、示唆に富むお話をいただくことができた。

各部会では、発表の後に研究協議が行われた。発表された事例を自校に持ち帰り、今後の自校での教育活動にどのように生かすか等、先生方の熱心な協議が行われた。参加者同士が活発に意見交換し、互いに学び合う様子が見られた。



熱心な研究協議の様子

アンケートでは、すべての部会で9割を超える参加者から、発表内容が「大変参考になった」「参考になった」という回答が寄せられた。自由記述では、「自校に持ち帰りすぐに使える内容が多くあった」「日頃考えいたことが整理できた」「小・中学校の取組は高校においても生かすことができる内容であった」「毎年、質の高い研究を聞くことができるので、とても参考になる」などの意見が多く寄せられた。

発表等の概要や各部会の大会当日の様子などは、栃木県総合教育センターのホームページで公開しているので参考にさせていただきたい。

授業に見る子供の姿を知るための取組

発表機関 栃木県教育研究所

発表者 上都賀教育事務所 星 昌志

### 1 研究主題について

栃木県教育研究所社会科部会では、「授業に見る子供の姿を知る」をテーマに、授業研究に取り組んできた。授業でも子どもの発言を分析し、その子の学びのきっかけを探ることで、子どもを授業の中でどう生かし、子どもの姿が変容していくかを研究していくこととした。

### 2 学級の実態

昨年度まで担任していた学級は単学級で、幼少から同じ顔ぶれで過ごしてきた。そのためどうしてもお互いの力関係や人間関係が固定してしまいがちである。「あの人にはかなわない」とか「あの人はこういう人だ」など、子ども同士がお互いのイメージを固定化してしまう。私は、これをこの学級の課題ととらえた。そこで、授業の中で子どものよさが生かされ、互いに認め合うことができるにはどのような方法があるかを部会で話し合っていた。

### 3 抽出児について

生かしたい児童2名を抽出し、授業の中でそれぞれの姿を追っていくこととした。

A児。学年があがり、その子なりの特技や個性が少しずつ伸びてきても、周囲からなかなか認めてもらえない存在である。A児は自分が興味をもった事柄については熱心に調べる。また、臆せず自分の意見を発表する積極性もある。しかしながら、自分の意見に満足してしまい、友達の意見のよさに気付かないことがたびたびある。

B児。歴史学習に対して関心が高く、知識も豊かである。理論的な思考力も身に付けている。何事も難なくこなしてしまう器用さがあり、周囲からは何でもできるリーダー的存在であると認められていた。

A児とB児は普段から仲が良く、行動を共にすることが多く、周りから何かと比較

されることがあった。

### 4 授業のねらいと手立て

A児のよさの一つである「興味をもったことに対する熱心な態度」をB児や周りの児童に認められたり、A児が「他の意見のよさに気付き」互いに認め合ったりすることができる授業を展開するには、どの単元でどのような学習計画を立てていくかを検討した。

授業で多数の意見が出たときに、様々な考えが正解となり、友達の様々な意見のよさを取り入れられる授業を考えた。具体的な授業計画として、扱う単元を「文明開化」に設定した。地元地域の文明開化を子どもたちそれぞれの視点で調べる活動を取り入れた。そうすることで、様々な事実が取り上げられ多様な意見が自由に出されるのではないかと考えた。A児を授業で生かすために、話合いが構築されるようオープンになるような展開を考えた。そこで、都会と農村の文明開化の伝播のずれの理由を話し合うことを取り入れた。

### 5 成果と課題

話合いの授業は、コミュニケーションの場である。今回のように自分の意見を発言した子どもらにとっては、休み時間などでは味わえない新たな仲間とのかかわりをもてた。発言しなかった子にとっても、他の意見に耳を傾けたことで当然かかわりをもつことができた。

こうしたかかわりの中で、今まで気付かなかったよさを認め、一体感や所属感を味わえたようである。

私自身にとっても、子どもたちの新たな一面を見つけることができた。子どもたちは、自分の思いをどうにかして相手に伝えようとする。教師は一人一人の意見をじっくり聞き、観察し、他の意見とつなげていく。そうすると、子どもたちがどういった思いをもっているのかが徐々に見えてくる。相手と正面から向き合い、互いの思いを考えを交換し合える話合いの場は、互いを認め合える最良の場であることを再認識することができた。

各教科等における  
言語力育成と言語活動の充実

発表機関 栃木県教育研究所

発表者 足利市立坂西北小学校 佐々井信子  
(学法)しらゆり幼稚園 若井 美幸  
宇都宮市立細谷小学校 堀内 多恵  
足利市立山辺小学校 池山 勝幸  
宇都宮大学教育学部附属中学校 小栗 英樹  
県立足利高等学校 浅間 浩一

### 1. 背景と言語活動の経緯について

新学習指導要領が告示されて、もっとも注目すべき改善事項に、言語力の育成、言語活動の充実がある。その背景には、OECDの国際学力調査(PISA)において「読解力」の低下、「全国学力・学習状況調査」の現状、いじめやニートなど人間関係にかかわる問題など喫緊の課題や社会的な要請などがある。そこで、「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要な能力の育成をめざすために、今日求められる学力「生きる力」の重要な要素として重視されている。知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等は、各教科において、基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと習得させると示されている。

「言語活動」と言われるようになった経緯であるが、社会全体で「国語力」を育成することが求められ、言語育成協力者会議で「言語力育成」の基本的な方向性が示された。これを受けて、学校教育活動の中で育成する「国語力」が重要な役割を担うとして、PISA型読解力を基盤として「言語力育成」が示された。しかし、「国語力」では、教科国語のみで育成する学力という誤解が生じ、「各教科等における言語活動の充実」(平19)となった。

### 2. 「言語力育成研究部会」の取組の概要

このような背景および動向を踏まえ、言語力育成研究部会が平成19年度に設置され、6年間の研究計画で進められてきた。幼・小・中・高等学校と、校種を超える研究部会である。大きくⅢ期、2年ごとの研究で、第1期(平19,20)は、言語力育成のための基礎的調査研究を行った。第Ⅱ期(平21)は、「言語に関する整理用一覧表《栃木県教育研究所

版》」を作成した。今年度は、それに基づいて授業研究を行った。そして、研究員の所属学校で授業実践し、研究員が校種を超えて参観し検証をしたものをまとめた。授業実践として、幼稚園8事例、小学校7事例、中学校5事例、高等学校3事例である。詳しい内容については、23年度5月に研究所から発行される冊子を参照していただきたい。

### 3. 全体を通して分かったこと

- (1) 発達の段階に応じた指導が重要で、発達の段階に応じて、具体と抽象、感覚と論理、事実と意見、基礎と応用、習得と活用と探究というように、認識や実践ができるものが変化していく。小学校で行う言語活動は、中学校・高等学校へとつながっていることを意識して、おさえること、育てるべきことをしっかり指導することが大切である。
- (2) 教科や領域において 共通する基本的な言葉や概念の理解・体験は、思考や表現、話合いの基盤となる。
- (3) 声を出す指導は、集中力を増し言語を意識する学習活動のきっかけに有効である。
- (4) 1つの教科等で、言語活動を充実させると、他の教科・領域へつながる。特に、国語科で培った能力は、知的活動の基盤となる言語の役割や、コミュニケーションや感性・情緒の基盤となる言語の役割として、各教科・領域等の基本的な力になる。
- (5) 異年齢集団による言語活動の場の設定、相手意識を明確にすると思考力が高まる。
- (6) ノートやカードに書かせるときは、考えが整理しやすいような工夫をする。
- (7) 個に応じた言語活動の工夫をする。友達同士の話し合いは、一人一人の考えを引き出すきっかけをつくる。教師は、その子に応じた適切な言葉かけや言葉を補うことで、言葉の知識を増やし自信と意欲を高める。

### 4. 4年間のまとめ

- (1) 語彙を豊かにするために、各教科等で工夫を凝らす。
- (2) 読書活動を推進する。
- (3) 学校図書館の活用や学校における言語環境の整備をする。
- (4) 各教科等を貫く取組が重要である。

**子どもが変わる授業研究**  
**—授業に見る子どもの姿を知る—**

発表機関 栃木県教育研究所  
 発表者 宇都宮大学附属中学校 川中子靖

**1 はじめに**

授業研究は、教材研究、発問の工夫、教材の工夫だけではない。その前に最も必要なのは、それぞれの子どもを知ることである。その上での教材研究は、そのような子どもをどのように育てるためには、どういう教材が適切なのか、発問はどのようにすればいいのか、教材は工夫すべきなのか、敢えて子どもに任せるべきなのかということが問われる。

子どもを知るためには「授業の様子で子どもを知る」ことが最も重要で、子どもの姿がわかる授業をすることが必要になってくる。そして、授業は行う前よりもむしろ、事後に「このとき、この子どもは本当は何が言いたかったのか」「それを私はどのように理解しようとしたのか」を逐語記録をもとに考えることが大切である。

**2 実践記録**

具体目標	学習内容・活動	生徒への支援	評価
本時の学習内容がわかる。	1 前時の流れを確認し、本時の学習内容を知る。  裁判員制度について話し合おう	・前時に視聴したDVDの感想をまとめたプリントを配り、質問や意見の参考にさせる。	・学習内容を確認し、意欲的に取り組む姿勢をもつことができたか。(関・意)
自分の考えを論理的に発表できる。 相手の意見を受けて話し合いができる。	2 裁判員制度についての意見や質問をもとにクラス全体で話し合う。	・考えが素直に言えるような雰囲気作り心がける。 ○他の意見を真剣に聞き、尊重できるように促す。	・自分の考えをまとめ、論理的に発表できた。(思・判)
本時の感想をまとめることができる。	3 本日の話し合いから気づいたことをまとめる。	・将来の生き方に触れて考えさせる。	・話し合いを通して感想をまとめることができた。

本単元「裁判員制度の是非について」では「他人の意見を聞くこと」に意識して授業を行った。教師が意見を述べるのではなく、あくまでも進行役に徹し、生徒同士の話し合い活動を通して、意見を述べたり、考えたりして生徒自身に気づかせることにした。特に裁判においては、両者の意見を聞き、裁判員と裁判官の両者が話し合いで判決を下すので、意見を聞くことがとても重要になってくるからである。この単元を通じて、人の意見を聞くことは他者理解につながることに気づいてほしいと考える。

ある生徒の授業後の感想には、「楽しかった」と書かれていた。この生徒は、ふだん物事に対して投げやりな面が見られたが、この授業では自分の意見をはっきりと主張することができ、積極的に参加できた充実感を感じていたのではないかと想像できる。

また、別なある生徒は一斉授業に参加するのが難しいことが多い。その生徒も「すごかった」と授業後に感想を書いていた。この生徒は一見、話を聞いていないような態度に見えても、話合いを聞き、授業に参加していたと考えられる。

**3 成果と課題**

このような授業では学力の高低や差といった要素はあまり問題とはならない。これら授業中の発言には、必ずその子の価値観やものの見方、考え方が表れており、その発言に至った何らかしらの根拠があると考えられる。だから、そうした言葉の奥にあるものを、我々教師側がひとつひとつ丁寧に見つめていくことで、その子に寄り添い、その子本来の姿に迫ることができるのである。

このように授業における話し合い活動は、教科の内容の理解の深化や興味・関心を高めるとともに、学級経営のうえでもよりよい人間関係を築くうえで大切な役割を果たすものと考えられる。

その一方で課題もいくつかある。生徒が興味を持って「話し合い」活動ができる資料を用意できるかと言うことである。また、生徒の感想をまとめる、授業記録を文字におこすといった作業は多くの労力を必要とする。そして、今回のような「話し合い」の授業は年間を通してそうできるものではないということである。

**4 おわりに**

最後に研究に参加されたコメントを紹介したい。

「我々が目指しているのは、単に知識の獲得量をはかることや〇〇ができるといった技能の習得を見るのではなく、その子が目の前の事態に対して粘り強く対峙し、仲間とともに解決に向けて自分らしく努めていこうとする姿を育てることにある」



校内研修部会

○J Tによる若手教員の育成

—宇都宮市若手教員育成システムを通して—

宇都宮市教育センター  
熊倉 仁

1 若手教員育成システム構築までの経緯

きっかけは校内研修の充実への強い要請

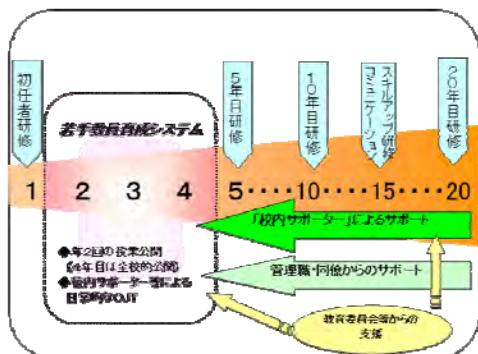
- (1) 学校には先輩教員から後輩教員へ伝承されてきた知恵や技が数多くあるが、一時期の採用人数の減少などに伴い、伝承が断絶することが危惧されている。
- (2) 教員の力量には「暗黙知」として獲得するものが多く、現場の実践を通じた研修が非常に有効

2 若手教員育成システムの概要

- (1) ねらい
  - ① 授業実践力の基礎を身に付けた若手教員を育成する。
  - ② 学校におけるOJTを活性化するとともに、教員の相互研鑽の雰囲気高める。
- (2) 対象  
教職2・3・4年目教員及び当該小・中学校
- (3) 実施内容  
若手教員が校内サポーター(※)の指導等により、年2回の授業公開並びに日常的なOJTを行う。

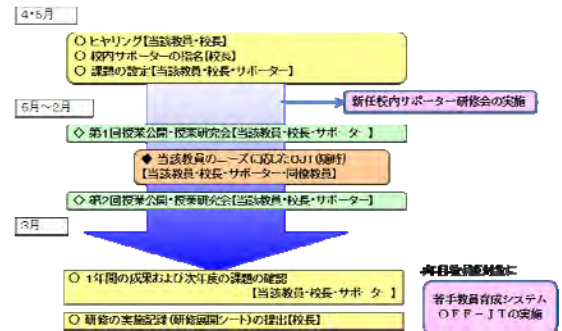
※ 校内サポーター  
校長が指名し、若手教員の授業実践力を向上させるため、直接的に指導したり、OJTのコーディネートをしたりする。

(4) イメージ図(研修体系での位置づけ等)



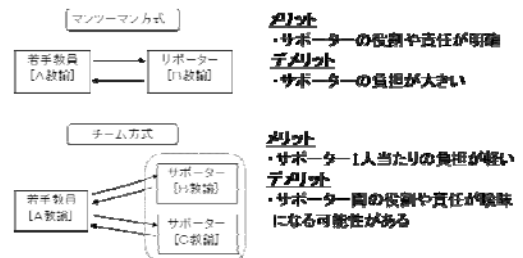
3 若手教員育成システムの実際

(1) 1年間の流れ



P D C Aサイクルに基づいて実践

(2) サポーターの指名方式



(3) OJTの内容として考えられること

- ・教材研究に関すること
- ・授業公開に関すること
- ・先輩教員の授業参観
- ・学級経営に関すること
- ・児童(生徒)指導に関すること
- ・配慮を要する子に関すること
- ・保護者の対応に関すること
- ・校務分掌に関すること
- ・その他

(4) 研修展開シート

この図は、研修展開シートのイメージを示しています。シートには「研修の目標」「実施の方法」「研修の展開」「必要記録」などの項目があり、具体的な研修内容が記入されています。また、「授業公開が完了」の欄があり、年月日が入力されています。

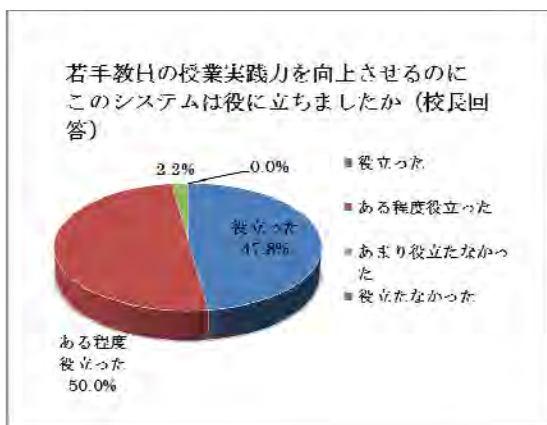
研修展開シートのコピーの提出をもって実践報告とする。

## 校内研修部会

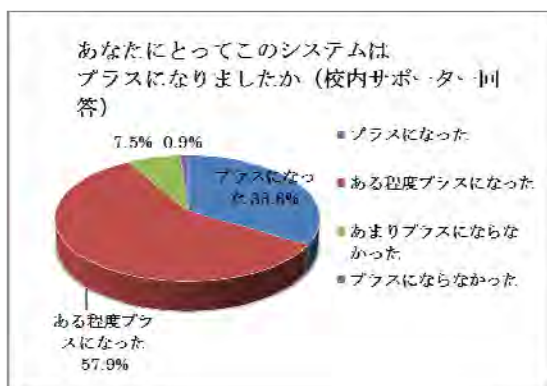
### 4 受講者の声

- ・ 研究授業のための教材研究や指導案作成なども勉強になったが、日常的に相談できたことが非常にありがたかった。日々の授業の流し方について気兼ねなく話げできたことが役立った。
- ・ 朝の会や帰りの会、給食など、授業以外の場面における、実際の児童生徒指導や学級経営の在り方について、具体的にアドバイスいただけたことが大変役立った。
- ・ 授業公開に向けての指導案検討や事前授業に取り組んだ体験が、今、毎日の授業作りに生きている。

### 5 アンケートの結果から



若手教員の授業実践力向上に役立っている。



校内の同僚教員にとってもプラスになっている。

### 6 成果と課題

#### (1) 成果

- ・ 若手教員の授業実践力の向上に役立っている。
- ・ 若手教員の育成を通して、校内サポーターにも自覚が生まれるとともに、他の教員まで刺激を受けて意識が変容し、校内研修の活性化につながっている。
- ・ 研修の過程では、「共に考える」姿勢が見られ、同僚性を高める上でも有効であった。

#### (2) 課題

- ・ 校内サポーターが指名されたことによって、本来多くの教職員が関わるべき若手教員の育成が、校内サポーターのみに任せられてしまう傾向も若干見られた。市教育センターとして、本システムに対する啓発を引き続き行う必要がある。

積極的なコミュニケーションを図る  
外国語活動の実践  
－修学旅行でのインタビューを  
通して－

発表機関 上三川町教育研究所

発表者 上三川町立本郷北小学校

渡辺 恭子

## 1 はじめに

学年が上がるに従い、生き生きと話していた子どもたちの輝きはなくなっていました。そこで、高学年でも楽しく外国語活動をするには、実際に英語を使う場面を設け、英語がコミュニケーションの手段として有効であることを体験してはどうかと考えた。

平成19年度の修学旅行で、グループ単位での外国人へのインタビューを実践し、その反省を生かして、21年度に、「修学旅行でインタビュー」の単元に再挑戦してみた。

## 2 研究の実際

### (1) 年間活動計画と系統性の見直し

#### ① 年間活動計画の変更点

1時間毎にテーマが変わると、学習したセンテンスがどのようにインタビューに生かされるのか、イメージしづらかった。実際に使う場面とセンテンスを結びつけ、内容の精選を行うと共に、学習のテーマも系統性を図った。

#### ② 6年修学旅行前の単元

自己紹介を意図的に取り入れると共に、既習の単語やセンテンスを多く使ったインタビューゲームを毎回組み入れた。5月には、修学旅行のグループになってゲームをした。英語ノートも教材の一部として積極的に使うようにした。

#### ③ 修学旅行での様子

箱根は外国人観光客が多く、どの国の方も好意的であった。インタビューの場所を限定し、安全確保ができた。

#### ④ 修学旅行後の単元

インタビューの終わりに撮った写真を使い、show & tell をした。その内容に対して、担任やALTが質問をする時間を

とり、インタビューの内容で何度も会話をすることができた。その後の単元でも修学旅行を教材に使用して授業ができた。

### (2) インタビューに慣れるために

#### ① インタビュー練習の工夫

何度もインプットを繰り返すために英語ノートのPC教材を使った。外国人役になりきってインタビューを受けたり、声掛けのあいさつは、全員で話しかけたり、前回の修学旅行で不十分だったことを練習に取り入れるようにした。ALTやボランティアの保護者を相手に、本番により近い形で事前体験もできた。

#### ② 会話を増やすプリントの工夫

高学年は、文字があると安心して会話ができるので、学習段階に合わせたインタビューカードを毎回用意した。教師が内容を記入したカードは、ゲーム感覚で答えるようにした。アルファベットで記入することにはこだわらず、聞き取ったことをそのまま記入できるように工夫した。

## 3 研究の成果

- (1) 英語を使うことに自信が持てるとともに、授業も積極的に取り組めるようになった。英語は、人と人をつなげる力があることを実感できたと思う。
- (2) 修学旅行後の授業も、同じ経験（見学場所・起床・食事・就寝・入浴等）が授業の単元に生かせ、興味が持続され効果的な外国語活動ができた。
- (3) インタビューの結果を5年生への発表会で披露したり、発表カードとして掲示したりした。その結果、5年生は来年に向けて学習の目標を持つことができた。

## 4 今後の課題

- (1) 相手を思いやるコミュニケーションの態度が十分ではなかった。英語の時間だけでなく普段の生活の中でも大切な態度なので、常に声を掛けていきたい。
- (2) 外国人だけではなく、日本人の観光客にもインタビューをするなど、国を超えて相手を特定せずにインタビューをさせてみたい。

市内小中学校における教育の情報化の推進  
—教員の ICT 活用指導力の向上を目指して—

佐野市教育センター  
(情報教育調査研究委員会)

1 はじめに

佐野市では、本年度、市内全小中学校で ICT 環境（校内 LAN の整備、教員一人一台校務用コンピュータ、教育用コンピュータ、電子黒板等）が整備された。佐野市教育センターでは、これらの機器等を効果的に活用し、教育の情報化を進めるための調査研究を今年度実施した。なお、研究推進に当たり、本調査研究委員会では、文科省が示した「教員の ICT 活用指導力の基準(チェックリスト)」から、以下に示す項目について重点的に研究を推進した。

- 授業中に ICT を活用して指導する能力
- 児童の ICT 活用を指導する能力
- 校務に ICT を活用する能力

2 研究実践の内容

(1) 授業中に ICT を活用して指導する能力の向上を目指した取組

- ① 電子黒板の効果的な活用を図るための現職教育の実践
- ② 特別支援学級で活用できるソフトウェアの開発

(2) 児童の ICT 活用を指導する能力の向上を目指した取組について

- ① 児童の ICT 活用場面の設定と年間指計画の作成

本市では、小学校向け教育用統合ソフト「キューブきっず3」が導入された。ICT を積極的に活用した授業を行うことができるようにするため、児童が「キューブきっず3」を活用する場面を設定した年間指導計画を作成した。

- ② 指導計画の検証

作成した年間指導計画をもとに、調査研究委員が所属する学校において実際に「キューブきっず3」を利用し、検証を行った。児童のスキル向上に役立つことが確認された。

(3) 校務に ICT を活用する能力の向上を目指した取組について

- ① ICT 支援員の活用

本市では、2校に一人の割合で ICT 支援員が配置された。ICT 支援員を効果的に活用した取組を考え、以下のとおり実践した。ICT 支援員とコーディネータが連携を図ることにより、教職員に対しての効果的な支援を図ることができた。

- ② 学校 Web サイト (NetCommons2.3) の校務への利用

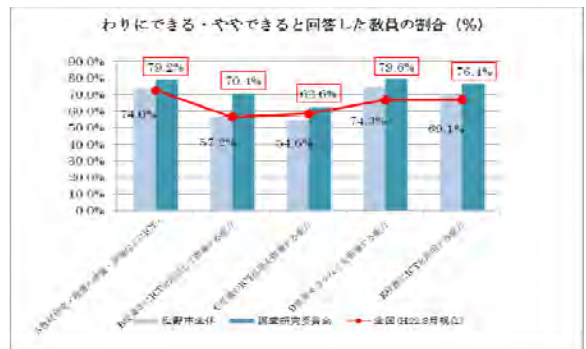
グループウェアを活用することによって多くの先生が、朝出勤したら校務用コンピュータを起動しログインする習慣がついた。また、学校 Web サイトに記事を投稿する際も、自席から手軽に投稿できるようになり、更新が頻繁になった。

- ③ 電子黒板を利用した校内電子掲示板としての活用

学校 Web サイト「部活動」のページの中に部活動ごとのページを作成した。部活動ごとのページには、練習予定等を各顧問が記載した。学校では、電子黒板を利用いつでも生徒が閲覧可能な状況にした。自宅等でも閲覧が可能であるため保護者にも部活動の予定を正確に伝えることができるようになった。

(4) ICT 活用指導力調査の実施

本調査研究委員が所属する6校の平均と佐野市全体の結果を比較した。全ての項目において、「わりにできる」「ややできる」と答えた教員の割合が高くなった。



3 成果

今回の取組から、教育の情報化を推進するためには、ICT 環境の整備とともに校長先生のリーダーシップの下、学校全体で活用を図ることが重要であることがわかった。

基礎・基本の確実な定着と  
自ら学ぶ意欲と自ら考える力の育成  
～「教えて考えさせる授業」の実践を通して～

発表機関 足利市立教育研究所

発表者 足利市立けやき小学校 薄井仁子

### 1 はじめに

本校では、児童に教えるべきことはしっかりと教え、考えさせるときにはじっくりと考えさせる授業の展開を図ることにより、確かな学力の定着に努めてきた。特に、学習過程の工夫、教師の教材研究の工夫、家庭学習の充実（予習を重視した学習）、複数の教師による「個」のみとりなどに取り組んできた。また、高等教育機関と連携し、各種学力調査の分析に基づく授業改善にも努めてきた。

### 2 研究内容

#### (1) 児童の実態把握

- ・各種学力調査やアンケート結果を基に、教材研究や授業研究、PDCAサイクルに基づく授業の評価・改善を行った。

#### (2) 学習を支える環境づくり

- ・算数科の授業におけるT.Tの実施
- ・読書の時間を設定

#### (3) 校内研修（研究授業）の実施

- ・算数科の授業研究の実践

##### 学習のサイクル

家庭での予習—授業—家庭での復習  
児童同士が分かったことを説明し伝え合う。

- ・「板書」と「ノート指導」の工夫

#### (4) 家庭学習の充実

- ・授業と接続させた予習・復習課題の出し方

##### 予習課題

教科書を読んでくる課題を出す。  
高学年は教科書にアンダーラインや付箋を付けさせる。

##### 復習課題

類題プリントやドリルを実施

#### (5) 保護者への啓発

- ・家庭学習に関するアンケートの実施
- ・講演会の実施
- ・授業参観と学校公開

### 3 授業の流れ

#### ①教える



本時のねらいに即して、指導内容を具体的に絞り込み分かりやすく伝える工夫をする。

#### ②考えさせる

理解と思考を深める課題を吟味し、適切に発問する。

#### ②-1考えさせる [理解確認]

児童同士がわかったことを説明し、伝え合うことを通して、課題の理解状況を確認する。



#### ②-2考えさせる [理解深化]



多様な考えを引き出し、既習内容を基にした問題に取り組ませ、活用を促す。

#### ③振り返らせる

分かったこと、分からなかったことを記述（自己評価）させ、客観的に判断できるようにする。

### 4 成果と課題

- 「予習をしているので分かりやすい。」と感じている児童が多くなった。また、授業の内容の理解度も高まった。
- 自分の考えを整理し、相手に分かりやすく説明することができるようになってきた。
- 児童自身がノートづくりをするようになった。
- ・『教えて考えさせる授業』の手法を生かした授業の在り方をさらに追究していくことや、算数科だけでなく他教科、領域等でも実践的研究を進めていくこと。